満洲字による漢字音表記の規範化
――満洲字千字文を資料として――

岸田文隆

１．はじめに
２．資料
３．表記の異同が生ずる要因
４．声母の表記
５．韻母の表記
６．おわりに

１．はじめに

満洲字によって漢字音をかきあらわした資料は、従来より近古漢語の重要資料とみなされ、これをその方面に利用した研究もいくつか発表されてきたが、実はその満洲字表記が額面どおりの音価をあらわしているのかどうかについては不明の点が多く、これらの資料を満洲語表記法の変遷の面から正確にあとづけていく研究はまだ立ちおくれている感がある。満洲字によって漢語からの借用語や漢語固有名詞もしくは漢字の発音をかきあらわすことは清朝建国以前からおこなわれていたが、その表記法の規範が完全に確立したのは、大雑把に言って乾隆時代、すなわち『増訂清文鑑』（1771序）の漢字に付された満洲字注音等の出現に至ってであると見てよいであろう。よって、清初から乾隆ころまでの諸資料を、満洲字による漢字音表記の変遷、規範化の観点から調べていくことが必要であるが、本論文では、このうち、康熙中葉ころ（17C末）に成立したと推測される満洲字千字文の諸テキストをとりあげ、検討を加えようと思う。

２．資料

ここで考察の対象とするのは以下の諸テキストである。

Ⅰ．「清書千字文」（略号Ｓ．Ｓ．）[1]

翰林院編修尤珍[bithei yamun biyan sio io jen]編。康熙24年（1685）９月１日[elhe taifin orin duin aniya uyun biyai ice inenggi]の奥書あり。『百體千字文』（大英博物館等所蔵）、『千字文註』（内閣文庫等所蔵）に収録される。満洲字のみで漢字はない。編者尤珍は、江南長洲の人、康熙20年（1681）進士で、有名な文人尤侗[2]の長子。『清史列伝』巻71、『国朝耆献類徴』巻119 に伝あり。[3]

Ⅱ－ａ．ヴァチカン図書館所蔵『満漢千字文』（略号Ｖ．Ｌ．）4)

対面に漢字と満洲字でそれぞれ「満漢千字文」「Man han ciyan dzi wen 」と題書される。また、その左には、漢字と満洲字で「京都永魁齋梓行」「Ging hecen yung kui folofi selgiyehe 」とあり、その発行所がわかる。序跋、刊記共になく、発行年は未詳（康熙中葉頃の刊本か？）。上段に満洲字、下段に漢字を配す。

Ⅱ－ｂ．パリ国民図書館所蔵満漢『千字文』（略号Ｂ．Ｎ．）5)

Ⅱ－ａにほぼ一致するが、部分的に異なるところがあり、版を異にしている。序跋、刊記、対面すべてなく、刊年、発行所共に未詳。Courant (1894-1901)No.3256によれば朝鮮本とのことであるが疑わしい。表紙の裏には、「葛」および「EX LIBRIS COLLIN DE PLANCY 」という蔵書印が押されており、本書が、もと、在京城佛国公使館員であったCollin de Plancy（漢名は葛林徳、1853～1922）の蔵書にかかるものであったことが知られる。満洲字、漢字の右側には、ところどころ、後人の手になるハングルの音注がある。ハングル注音のかきいれ年代も不明なれど、17世紀末～18世紀初よりも後のことと思われる。

Ⅲ－ａ．大英博物館所蔵『満漢千字文』（略号Ｂ．Ｌ．）6)

対面の中央に漢字と満洲字で「満漢千字文」「Man han ciyan dzi wen 」と題書され、その右に「京都奎壁齋梓行」、左に「福賢堂」とある。奥書には「沈啓亮書」「šun ki liyang šu」および「廣城同文堂梓」とある。「廣城」は広州の意。康熙年間（1662～1722）の刊行か？

Ⅲ－ｂ．ライデン大学漢学研究所所蔵『満漢千字文』（略号Ｕ．Ｌ．）7)

対面の中央に漢字と満洲字で「満漢千字文」「Man han ciyan dzi wen 」と題書され、その右に「京都奎壁齋梓行」、左に「省城九曜坊翰經堂蔵板」とある。奥書には「沈啓亮書」「šun ki liyang šu」および「羊城翰經堂梓」とある。「羊城」は広州の意。対面と奥書以外はⅢ－ａと異なるところなく、Ⅲ－ａの極めて忠実な覆刻本のようである。

以上の満洲字千字文諸テキストの満洲字表記を、その他の諸資料（『増訂清文鑑』（1771序）、『欽定清漢対音字式』（1772勅撰）など乾隆期の規範的な資料、および清初刊行の非規範的な資料など）にあらわれるものと比較しながら検討していくこととする。

３．表記の異同が生ずる要因

満洲字千字文の各テキストにあらわれた満洲字表記を観察すると、各テキスト間にあるいは満洲字によって漢字音をかきあらわしたその他の諸資料との間に異同が発見されることがあるが、これはいかなる理由によるものであろうか？　もとより

この問題は将来満洲字による漢字音表記の変遷の全貌が明らかになったのちに考えるべきものであって、ここにその確答を得ることは困難であるが、考察を進めるに際して、仮にそのような表記の異同が生ずる要因として想定されうるものを整理・提示しておくことも有効であろうと思う。

満洲字による漢字音表記の異同の中には、まず、表記法上のちがいによると思われるものがある。一体、満洲字によって漢字の発音を表記する方法には、満洲語の音節一覧表であるいわゆる満洲字十二字頭の１綴字をあてる「対音」という方法と、漢語韻書に見られる反切法の上字・下字のように満洲字十二字頭の２綴字を組合わせてあらわす「切音」の２者があるが、規範的な資料の場合は、ふつう、当該漢字音が満洲字十二字頭にある字音と同じ場合には前者の方法が用いられ、満洲字十二字頭に同じ字音を求められない場合、すなわち満洲字十二字頭中の１綴字をもってしてはその音をあらわすことができない場合にかぎってのみ後者の方法が用いられる。8)

「対音」の例　　mi：彌。密。［欽定清漢対音字式:5b］

（第一字頭のmi１字のみで漢字の音をあらわす）

「切音」の例　　niyan ：年［欽定清漢対音字式:47a］

（第一字頭のniと第四字頭のyan の２字を組合わせて漢字の音をあらわす）

ところが、未だ規範化されていない資料においては、当該漢字音と同じ字音が満洲字十二字頭にある場合においても、本来用いるべき「対音」の方法にはよらずに、「切音」の方法によったと思われる例がままあり、表記の不統一がみとめられる。例えば、満洲字千字文のいくつかのテキストにおいても、次の例のように、-an, -ang, などの韻母をもつ漢字の表記にこの現象が観察される。

No.	漢字	現代北京音	S．S．	V．L．	B．N．	B．L．	U．L．
191	難	nan	nan	naan	naan	nan	nan
446	張	zhang	jang	jaang	jaang	[jang]	[jang]

上の例において、S．S．のnan,jangという表記は「対音」の方法により満洲字十二字頭の１綴字をあてたものであるが、V．L．などにあらわれるnaan、jaang という表記は「切音」の方法により十二字頭の２綴字、すなわちnaとan、jaとang を組合わせて表記したものと推測される。

また、同じ「対音」の方法による場合においても、満洲字十二字頭のうちのどの字頭をあてるかによって表記がことなることがある。次の例を見られたい。

No.	漢字	現代北京音	S．S．	V．L．	B．N．	B．L．	U．L．
563	密	mi	mi	mii	mii	mii	mii

上の例で、S．S．は満洲字十二字頭のうちの第一字頭に属するmiをあてているが、V．L．などは第一字頭の末尾に-iを付加した第二字頭のmii をあてている。

以上の例におけるnan ～naan, jang～jaang, mi ～mii という表記の流動は、あるいは母音の短・長など実際の発音のちがいを反映したものである可能性もなくはないが、おそらくはそうではなく、表記者の表記意識、すなわち漢語韻書の反切上字下字のように当該漢字音を分析的に表記しようとする意識の無・有に帰されるべきものであろうと思う。したがって、これらの表記の異同は、単に表記法上のちがいにすぎないものであり、当該漢字の発音とはかかわらないと推測する。

次に、漢字音自体のちがいによると考えられる表記の異同がある。漢字音のちがいは、歴史的変化によるもの、方言的差異によるものなどが当然想定されようが、実際に諸資料にあらわれる表記の異同をそのような原因に帰するには、満洲字表記の変遷と漢字音の歴史的変化とがくいちがっていたり、満洲字表記の特徴と一致するような漢語方言を見出せなかったりといったさまざまな困難が横たわっていて、必ずしも容易でない場合が多い。むしろ、満洲字による漢字音表記が資料によって異なっている原因の多くは、歴史的・方言的な漢字音のちがいではなく、同一時代・同一方言における弁別的あるいは非弁別的な発音のちがいに求めるべきではないかと感じられる。

まず、満洲字表記の異同が同一時代・同一方言における漢語の弁別的な発音のちがいを反映していると考えられるものとしては、文白異読の例がある。満洲字千字文のテキストにおける次のような表記の異同は、当該漢字の文言音と白話音のちがいによるものと推測される。

No.	漢字	現代北京音	S．S．	V．L．	B．N．	B．L．	U．L．
12	昃	ze	je	jai	[jai]	jai	jai
372	惻	ce	ce	cai	cai	cei	cei
910	獲	huo	hūwe	howai	howai	hūwai	hūwai

この例において、S．S．のje, ce, hūweいう表記は漢字「昃」「惻」「獲」の文言音を、V．L．などのjai, caiあるいはcei, howaiあるいはhūwai という表記はそれぞれの漢字の白話音をあらわしていると見られる。このような文白異読による満洲字表記の異同は、それぞれのテキストの資料的性格と深くかかわっていると思われるが、これらは、同一時代・同一方言の漢語における音韻的対立をなす異なる音をあらわしたものと判断される。

次に、満洲字表記の異同が同一時代・同一方言における漢語の非弁別的な発音のちがいを反映していると考えられるものとしては、韻腹の［ə］の有無に関する表記の異同の例がある。満洲字千字文のテキストには、次のような例があらわれる。

No.	漢字	現代北京音	S．S．	V．L．	B．N．	B．L．	U．L．
386	静	jing	jing	jiyeng	jiyeng	jiyeng	jiyeng
771	委	wei	wei	ui	ui	ui	ui

No.386において、S．S．のjingという表記は韻腹の［ə］を持たない発音を、V L．などのjiyengという表記は韻腹の［ə］を持つ発音をそれぞれあらわしていると見られる。また、No.771において、S．S．のwei という表記は韻腹の［ə］を持つ発音を、V．L．などのuiという表記は韻腹の［ə］を持たない発音をあらわしていると考えられる。このような表記の異同は、（同一時代・同一方言での）漢語の音韻体系にあっては対立関係にない場合場合の発音もしくは音色のちがいを反映したものと判断される。9)

満洲字による漢字音表記の異同の原因は、主に上記の２点すなわち満洲字表記法のちがいと漢字音自体のちがいに求められようが、特に満洲字による漢字音表記の変遷・規範化の過程を考えるうえで注目したいことは、表記者の音韻体系のちがい・変化である。ある漢字の発音を表記するにおいて、満洲語を母語とする者がおこなった場合には、満洲語にはない漢語の音韻的対立をかきわけなかったり、あるいは逆に、漢語の音韻体系とは無関係の場合場合の発音のちがいが表記に反映されるようなことがあろうが、漢語を母語とする者がおこなった場合には、そのような漢語の音韻体系にはそぐわない面は淘汰されることになるであろう。周知のとおり、満洲族が中原に位すること久しきにおよぶにつれて、徐々に満洲語は忘却され漢語が話されるようになった次第であるから、満洲字によって漢字の音をかきあらわす表記者の音韻体系も満洲語のそれから漢語のそれへと変化していったと考えてまちがいなかろうが、たしかに、満洲字による漢字音表記の変遷のありさまを俯瞰すると、おおむね漢語の音韻体系に合うような表記へと統一されていく傾向が見てとれる。例えば、もともと満洲語にはなかった漢語の音韻的対立を区別して表記するようになったものとしては、後に述べる［ŋ］韻尾の例を挙げることができるし（尖団の区別の例もここに該当するかもしれない。次章［１］を参照。）、漢語においては音韻的対立関係にない発音のちがいをかきあらわさなくなったものとしては、先に述べた韻腹の［ə］の有無に関する表記の例を挙げることができる。満洲字による漢字音表記が漢語の音韻体系に合うように統一されていく現象を、従来は主に漢語の正音指向・規範意識という観点から論じられてきたようであるが、10) 筆者は、それと合せて、表記者の音韻体系の変化という点も考慮すべきであると思う。

以上、簡単に提示した表記の異同が生ずる要因を念頭におきながら、満洲字千字文の諸テキストの満洲字表記を具体的に検討していくこととする。

４．声母の表記

［１］尖団の区別

いわゆる「尖団の合一」は、近古漢語音韻史の一問題であり、精母［ｔｓ］清母

［ｔｓ‘］心母［ｓ］に属する漢字すなわち尖音字と見母［ｋ］渓母［ｋ‘］暁母［ｈ］に属する漢字すなわち団音（円音とも）字が音韻的対立を失うことを言うが、満洲字千字文の諸テキストにおいては、この点、おおむねは尖団両音をよく区別した、きわめて保守的な表記をおこなっている。

No.	漢字	現代北京音	Ｓ．Ｓ．	Ｖ．Ｌ．	Ｂ．Ｎ．	Ｂ．Ｌ．	Ｕ．Ｌ．
41	金	jin	gin	gin	gin	gin	gin
228	積	ji	ji	ji	ji	ji	ji

上の例において、No.41 の「金」もNo.228の「積」も現代北京音ではその声母は口蓋化したj［ｔɕ］であるが、満洲字千字文の諸テキストの表記は、見母字に由来する「金」には満洲字g を、精母字に由来する「積」には満洲字j をあて、尖団の区別をおこなっている。しかし、次の例においては、いくつかのテキストにおいて、表記の混乱が見られる。

No.	漢字	現代北京音	Ｓ．Ｓ．	Ｖ．Ｌ．	Ｂ．Ｎ．	Ｂ．Ｌ．	Ｕ．Ｌ．
598	軍	jun	giyūn	[giowen]	[giowen]	jiyūn	jiyūn
723	見	jian	giyan	jiyan	jiyen	jiyan	jiyan
955	懸	xuan	siowan	hiuwan	欠落	hiowan	hiowan

いずれも牙喉音に由来する「軍」「見」「懸」の声母に対して満洲字のj やs があてられているのは、これらの団音字の声母がすでに舌面音になっていたことを伝えるものと見られる。ちなみにNo.955においてＳ．Ｓ．がsiowanに作っているのは、康熙帝の名の「玄燁：hiowan yei」に用いられるhiowanの綴りを避けたものであろう。11)

また、次の例では、Ｂ．Ｌ．などにおいて歯音の精母［ｔｓ］に由来する漢字に満洲字k（本来はg に作るべきところで、g の点が欠漏したものと見える）があてられている。

No.	漢字	現代北京音	Ｓ．Ｓ．	Ｖ．Ｌ．	Ｂ．Ｎ．	Ｂ．Ｌ．	Ｕ．Ｌ．
561	俊	jun,zun	jiyūn	dzun	dzun	kiyūn	kiyūn

これは過剰訂正（hypercorrection)によるものと見られ、このような現象が起こる背景には、この時代Ｂ．Ｌ．等のテキストが依拠した漢語において尖団両音がすでに音韻的対立を失い合流しつつあったことがあると考えられる。

尖団の区別に関する満洲字表記の変遷は、近古漢語の歴史的変化とは一見したところ逆行した方向をとっている。すなわち、漢語の歴史的変化としては団音声母が舌面音化してやがて尖音声母と合流するという流れであるが、諸テキストに現れる実際の満洲字表記ではむしろ反対に、初期のテキストには団音声母の舌面音化を示す表記が多くあらわれるのに対して、後代のテキストにはそのような表記はあまりあらわれなくなり、尖団の区別をまもった表記が優勢となるのである。例えば、三

国志演義の満洲語訳：ilan gurun i bitheの２つの版本、順治７年（1650）刻本の満文本（殿本）と雍正年間（1723～1735）刻本の満漢合璧本（二酉堂書舗発行？）にあらわれる「将軍」にあたる満洲語の綴りを調べてみると、満文本の方はすべてjiyangjiyūn と綴られ、団音字「軍」の声母に舌面音化を示す満洲字ｊをあてているが、満漢合璧本の方はjiyangjiyūn という表記のほかに尖団の区別をまもったjiyanggiyūn という表記も両者あい半ばする頻度であらわれるのである。また、山崎（1990ｃ）において指摘されているように、『大清太祖武皇帝実録』（崇徳元年（1636）告成？）と『満洲実録』（乾隆年間（1736～1796）成立）の漢語借用語の表記を比べてみると、『大清太祖武皇帝実録』では見渓暁母の牙喉音に由来する漢字の表記に満洲字j,c,s をあてた、舌面音化を示すと見られる例が多くあらわれるのに対し、『満洲実録』ではそれらはすべて満洲字g,k,h に改められ、尖団の区別をまもった表記へと一新しているのである。

漢字	『大清太祖武皇帝実録』の表記	『満洲実録』の表記
吉	ji	gi
奇	ci	ki
希	si	hi

このように満洲字による漢字音表記が近古漢語の歴史的変化とは逆行して尖団音をかきわけるようになっていく現象は、従来は主に漢語の「正音」指向すなわち規範意識という観点から説明がなされてきた。(12) しかし、筆者は、そのような観点と合せて、表記者の音韻体系の変化という点も考慮する必要があると思う。

ここでひとつ確認しておきたいことは、牙喉音（団音）の舌面音化という現象と尖団両音の合一という現象は区別して考えなければならないということである。前者は音声のレベルの現象であり、後者は音韻のレベルの現象である。すでに山崎（1990ｃ）において述べられているように、清初の漢語において牙喉音（団音）すなわち見母［ｋ］渓母［k'］暁母［ｈ］の舌面音化は起こっていたが、暁母［ｈ］を除いて、未だ歯音（尖音）（見母［ｋ］に対しては精母［ｔｓ］、渓母［k'］に対しては清母［ｔｓ'］）との区別は保たれていたと考えられる。すなわち、心母［ｓ］暁母［ｈ］を除いて尖団の合一には至っていなかった。ところが、清初の表記者は満洲語の音韻体系で漢字の発音を聞き表記したために、舌面音化した団音字に対し尖音字にあてるのと同じji,ci などの表記をあてたのである。しかし、清代も中ごろとなると漢化の程度も深まり、表記者の音韻体系は漢語の音韻体系にかわった。そこで、清初においては聞きわけられなかった舌面音化した団音字と尖音字の区別をなしうるようになり、異なった満洲字（団音字にはg,k 、尖音字にはj,c ）をそれぞれにあてるようになったのである。(13)

音韻のレベル	音声のレベル	初期の満洲字表記（表記者＝満洲語の音韻体系）	後代の満洲字表記（表記者＝漢語の音韻体系）
尖音		ji,ci	ji,ci
団音	舌面音	gi～ji, ki～ci	gi,ki

満洲字による漢字音表記が漢語の歴史的変化とは逆行した変遷をたどることの背景には、このような表記者の音韻体系の変化があったと考えられる。しかし、清初の漢語においてすでに合流していたと考えられる心母［ｓ］と暁母［ｈ］の区別を後代の満洲字表記でかきわけるようになることについては、叙上の説明では不十分でやはり、従来どおり「正音」指向・規範意識という観点から解釈するほかないであろうか。この点、すこし問題が残ることを付言しておかねばならない。

［２］si/šǐ/sy

一般に規範的な資料の場合、満洲字si,šǐ,syはそれぞれ現代北京音xi［ɕi］,shi［ʂʅ］,si［sɿ］を持つ漢字の発音を表記するのに用いられる。例えば、『増訂清文鑑』では満洲字si,šǐ,syはそれぞれ次のような漢字にあてられている。（Noは中島（1993, 1994）による。以下同様。）

No.	漢字	現代北京音	満洲字表記
346	昔	xi	si
2170	使	shi	šǐ
340	四	si	sy

ところが、満洲字千字文の諸テキストにおいては、現代北京音のxi,si を持つ漢字にそれぞれ満洲字si,sy をあてることについては一二を除いてほとんど例外がないが、現代北京音shi を持つ漢字の表記についてはおおいに混乱しており、満洲字šǐのほかにsiやsyをあてた例が随所に見られる。

No.	漢字	現代北京音	S．S．	V．L．	B．N．	B．L．	U．L．
74	師	shi	šǐ	si	si	šǐ	šǐ
186	使	shi	sy	sy	sy	sy	sy
513	世	shi	šǐ	si	si	si	si

満洲字千字文の各テキストにおいて現代北京音shi の漢字がどのように表記されているかを示せば以下のとおりである。

満洲字表記	S．S．	V．L．	B．N．	B．L．	U．L．
si	2	14	13	10	10
šǐ	18	4	4	9	9
sy	2	3	3	3	3

合計	２２	２１	２０	２２	２２

現代北京音shi の漢字に対して、Ｓ．Ｓ．は規範的な資料と同じく満洲字šiをあてるが、Ｖ．Ｌ．とＢ．Ｎ．は満洲字siをあてる。そしてＢ．Ｌ．とＵ．Ｌ．は両表記があい半ばしている。このような表記の混乱の理由についてはまだ明らかではないが、満洲字siがšiと発音上区別がない場合があったこと[14]と関連があるものと見られる。

５．韻母の表記

［１］ao/oo

満洲字千字文の各テキストは、現代北京音の韻母aoを持つ漢字の表記に関して異同を示している。

No.	漢字	現代北京音	Ｓ．Ｓ．	Ｖ．Ｌ．	Ｂ．Ｎ．	Ｂ．Ｌ．	Ｕ．Ｌ．
31	調	tiao	tiyoo	tiyao	tiyao	tiyao	tiyao
767	早	zao	dzoo	dzao	dzao	dzao	dzao

現代北京音の韻母aoを持つ漢字に対して、Ｓ．Ｓ．は多く満洲字ooをあてる（全58例中46例）。しかし、Ｖ．Ｌ．では満洲字aoとooがほぼ同じ頻度であらわれる（全58例中aoが26例、ooが29例）などしており、テキストによってばらつきが観察される。

『増訂清文鑑』の漢字に付された満洲字注音では、現代北京音の韻母aoを持つ漢字には、ふつう、満洲字aoがあてられる。

No.	漢字	現代北京音	満洲字表記
510	早	zao	dzao
1814	報	bao	bao

ただし、同書の「部院」の条目には、例外的に満洲字ooがあてられたものも見られる。

漢字	現代北京音	満洲字表記
報房	bao fang	boo fang
寶源局	bao yuan ju	boo yuwan gioi

さらに後代の韻書である『音韻逢源』（1840）では、現代北京音の韻母aoを持つ漢字（高、縞、考など）はすべて満洲字aoの韻摂のところに配されており、満洲字ooの韻摂のところには何も漢字がかかれていない。このことから、清中期以降の規範的な表記では現代北京音の韻母aoを持つ漢字には満洲字aoをあてることになっていたものと推測される。

しかし、「新刻清書全集」（1699）に収録された『清書対音協字』においては、aoという満洲字表記は見あたらず、現代北京音の韻母aoを持つ漢字はすべて-oo と

いう満洲字綴りのもとに配されている。

このように、現代北京音の韻母aoに対応する漢字音の表記において、満洲字表記法の変化あるいは混乱があったものと考えられる。S．S．において多く満洲字ooがあてられているのは、あるいは『清書対音協字』に見られるような古い表記規範に則ったものかも知れない。満洲字ooは時に［ａｏ］と発音されることがあったようであるが、[15] 満洲字ooとaoの表記の流動はそのような発音と表記の乖離に原因があるものと思われる。

［２］ū/o,owe,u

満洲字千字文の諸テキストの間には、満洲字ū の用い方にちがいが見られる。

NO.	漢字	現代北京音	S．S．	V．L．	B．N．	B．L．	U．L．
4	黄	huang	hūwang	howang	howang	hūwang	hūwang
244	君	jun	giyūn	giowen	giowen	giyūn	giyūn
479	群	qun	giyūn	kiowen	kiowen	kiowen	kiowen
739	尋	xun	siyūn	siowen	siowen	siowen	siowen
33	雲	yun	yūn	yun	yun	yun	yun
119	戒	rong	žūng	žung	žung	žung	žung

満洲字ū は、S．S．では多く用いられているが（34例）、V．L．ではあまり用いられていない（11例のみ）。B．L．は両者の中間である。上のNo.4の例に見られるように、現代北京音のhu- で始まる漢字の発音を表記する場合、S．S．ではほとんど満洲字(h)ūをあてるが（26例中19例）、V．L．では(h)ūはあまり用いず（26例中５例）(h)oを多くあてる（17例）。また、No.244,479,739のように、現代北京音の韻母-un が声母j,q,x に後続するときの漢字の発音を表記する場合も、SS．ではすべて満洲字ū(n)をあてるが（８例中８例）、V．L．ではū(n)をあてた例はなくすべてiowe(n) と表記している（７例中７例）。これらūn,iowenという２つの表記は、それぞれ漢語の韻母-un における韻腹の［ə］の無・有に対応するものであろう。さらに、No.33,119 などのように、現代北京音yun, rongなどの漢字の発音をあらわす場合にも、S．S．ではほとんど満洲字ū をあてるが、V．L．ではあまりū は用いずにu をあてている。

『増訂清文鑑』においては、上に示したような漢字音を表記する場合、満洲字ū を用いる。ただし、現代北京音rongの漢字の音を表記するときは、満洲字ū は用いずにu を用いる。

No.	漢字	現代北京音	満洲字表記
17	黄昏	huang hun	hūang hūn
1025	君	jun	giyūn

2483	羣	qun	kiyūn
276	薫風	xun feng	hiyūn fung
144	雲	yun	yūn
595	融化	rong hua	yung hūwa
1869	冗雑	rong za	žung dza

このことから、後代の表記規範は、おおむねＳ．Ｓ．における表記法に一致していると言える。

満洲字ū には［ｏ］［ö（ｏｗｅ）］［ｕ］等の音価があったと推測されるが、[16] 上に述べた満洲字ū とo,owe,u の表記の流動の現象もそのような満洲字ū の音価についてのひとつの資料になりえると思う。

［３］i/ii

現代北京音のi 韻母に対応する音の表記において、満洲字千字文の各テキストは異同を示すことがある。

No.	漢字	現代北京音	Ｓ．Ｓ．	Ｖ．Ｌ．	Ｂ．Ｎ．	Ｂ．Ｌ．	Ｕ．Ｌ．
59	李	li	li	li	li	li	li
43	麗	li	lii	lii	lii	lii	lii
563	密	mi	mi	mii	mii	mii	mii
319	益	yi	i	ii	ii	ii	ii

No.59 ではいずれのテキストも満洲字i をあてているが、No.43 ではすべてのテキストが満洲字i を２つ重ねたiiという表記をおこなっている。No.563,319においてはテキスト間にちがいが見られ、Ｓ．Ｓ．は満洲字i をあてるのに対し、Ｖ．Ｌ．などは満洲字iiをあてている。現代北京音のi 韻母に対応する音を表記する場合、どのテキストもおおむねは満洲字i をあてており、満洲字iiが用いられるのは少数である。ところがその頻度にちがいがみとめられ、iiという表記があらわれる回数は、Ｓ．Ｓ．８例に対して、Ｖ．Ｌ．では16例もある。

この満洲字i ～iiという表記の流動については、母音の短・長あるいは声調など実際の発音上の区別と関係があるとの説があるが、[17] 筆者の考えではおそらくそうではなく、第３章に述べたように表記者の表記意識のちがいによるものと推測される。すなわち、満洲字十二字頭の第一字頭をあてた表記-iの方は、当該漢字音を特に分析的にかきあらわす意図はないのに対し、第二字頭をあてた表記-ii の方は、漢語韻書の反切上字下字のように漢字音を分析的にかきあらわそうとし、反切下字にあたるi を末尾にさらに加えたものであろうと思う。

このiiという満洲字表記は、満洲字千字文のテキストにはいくつかあらわれているが、後代の規範化された表記では次第に淘汰された。『増訂清文鑑』の漢字に付

された満洲字注音についてみると、満洲字l に接続して用いられたlii という形を除いて、他はすべて廃止されている。

No.	漢字	現代北京音	満洲字表記
215	密	mi	mi
14	黎	li	lii

『増訂清文鑑』でi 韻母を表記するときl の後にくる場合に限ってi とは綴らずにiiと綴るのは、乾隆帝の名前の「弘歴：hung li 」に現れるliの綴りを用いるのを憚ったからである。「欽定清漢対音字式」には、満洲字で文書をかく際に皇帝の名にあらわれるものと同一の音節を表記するのを避けて改音（改綴字）を行う場合の例（按語の例）(8) が掲げられているが、その中に満洲字綴りのliをlii と改める例が出ている。

lii 禮。里。理。　俱平聲讀。按　高宗純皇帝廟諱下一字用lii 字恭代　[4a]

満洲字千字文の諸テキストには、子音l の後にくるi 韻母の表記にi とiiの両方の表記が見られ、また、l 以外の子音の後でもiiという表記がいくつかあらわれる（mii やゼロ声母のiiなど）。これは、未だ規範化されていない表記の一面を示すものと言えよう。

［４］i/ye,iye

現代北京音の韻母in, ing などに対応する音を表記するとき、満洲字千字文の各テキストは異同を示すことがある。

No.	漢字	現代北京音	Ｓ．Ｓ．	Ｖ．Ｌ．	Ｂ．Ｎ．	Ｂ．Ｌ．	Ｕ．Ｌ．
111	平	ping	ping	ping	ping	ping	ping
280	映	ying	ing	yeng	yeng	yeng	yeng
464	星	xing	sing	siyeng	siyeng	sing	sing
496	卿	qing	king	kiyeng	kiyeng	king	king
690	音	yin	in	yen	yen	yen	yen

No.111ではすべてのテキストが満洲字-ingをあてているが、No.280,464,496,690ではテキスト間にちがいが見られ、Ｓ．Ｓ．は-ing,-inをあてるのに対し、Ｖ．Ｌ．などは-(i)yeng,-yen をあてている。現代北京音の韻母in,ingに対応する音を表記する場合、Ｓ．Ｓ．はすべて満洲字-in(29例）,-ing(55例）をあてるが、Ｖ．Ｌ．は満洲字-in(26例）,-ing(48例）のほか満洲字yen(２例）,-(i)yeng(６例）もあてるなどテキストによりばらつきがある。このような満洲字i/ye,iyeの表記の流動は、先にも述べたとおり、漢語の韻母in,ingにおける韻腹の［ə］の無・有にかかわるものであろう。

後代の規範的な資料においては、按語の例を除いて、満洲字ye,iyeという表記は

次第に用いられなくなり、満洲字i に統一されていく。「増訂清文鑑」では、韻母ing の漢字に対しては、S．S．に同じく、すべて満洲字ing をあてている。ただ、現代北京音がyin である漢字の表記については、雍正帝の名「胤禎：in jen」に用いられるinの綴りを避けるため満洲字inをあてずにyen をあてる。[19]

No.	漢字	現代北京音	満洲字表記
64	星	xing	sing
151	陰	yin	yen

このように漢語にあっては音韻的対立をなさない韻母in,ingなどの韻腹［ə］の有無について、満洲字表記が統一されていった理由は、表記者の音韻体系が満洲語のそれから漢語のそれへと変化し、漢語の音韻体系に則った表記をおこなうようになったためであると考えられる。

［5］iya(i)/iye(i)

現代北京音の韻母ieを含む漢字の中には皆来韻の［ｉａｉ］韻に由来するものと車遮韻の［ｉε］韻に由来するものがあるが、そのような漢字の音の表記において、満洲字千字文の各テキストは異同を示すことがある。

No.	漢字	現代北京音	S．S．	V．L．	B．N．	B．L．	U．L．
63	芥	jie	giya	[giye]	[giye]	giye	giye
458	階	jie	giyei	[giye]	[giye]	giyei	giyei
708	誡	jie	giya	giye	giye	giye	giye
725	解	jie	giya	giye	giye	giye	giye
934	皆	jie	giyai	giyei	[giyei]	giyei	giyei

上の例に見られるように、皆来韻に由来する漢字については、S．S．ではおおむね満洲字-iya(i) をあてるが、V．L．などでは-iye(i) をあてる。ただし、S．S．においても、No.458では例外的に満洲字-iye(i) をあてている。

No.	漢字	現代北京音	S．S．	V．L．	B．N．	B．L．	U．L．
15	列	lie	liye	liye	liye	liye	liye
38	結	jie	giyei	kiyei	kiyei	giyai	giyai
164	潔	jie	giyei	giye	[giye]	giye	giye
326	別	bie	biyei	biye	biye	biye	biye
365	切	qie	ciyai	ciyai	ciyai	ciyai	ciyai

上の例に見られるように、車遮韻に由来する漢字については、いずれのテキストもおおむね満洲字-iye(i) をあてる傾向があるが、No.38,365 のように例外的に-iyai をあてたものも見られる。[20]

規範的な資料においては、現代北京音の韻母ieに対応する音を表記する場合、皆

来［ｉａｉ］韻に由来するものには満洲字iyaiをあて、車遮［ｉε］韻に由来するものには満洲字iyeiをあてる。例えば、乾隆代の『増訂清文鑑』について見れば、次のようである。

	No.	漢字	現代北京音	満洲字表記
皆来韻に由来する漢字	1498	街	jie	giyai
	1510	解	jie	giyai
車遮韻に由来する漢字	468	節	jie	jiyei
	1995	接	jie	jiyei

また、清初刊行の『清書対音協字』においても、戒・解・介・皆・蟹など皆来韻に由来する漢字は満洲字-iyai のもとに、別・謝・鉄・切・節など車遮韻に由来する漢字は満洲字-iyei のもとにそれぞれ配され、例外がない。

満洲字千字文の諸テキストで、皆来韻および車遮韻由来の漢字について満洲字-iya(i)/-iye(i) の表記の流動が見られることは、当時の漢語において両者がすでに音韻的対立を失っていたことを示すものと見られる。『増訂清文鑑』など規範的な資料において両者をかきわけているのは、「正音」指向すなわち規範意識によるものであろうか？

［６］yu/io

現代北京音のyuan,yueに含まれるyuに対応する音の表記において、満洲字千字文のテキスト間に異同が見られる。

No.	漢字	現代北京音	Ｓ．Ｓ．	Ｖ．Ｌ．	Ｂ．Ｎ．	Ｂ．Ｌ．	Ｕ．Ｌ．
10	月	yue	yuwei	[iowai]	[iowai]	iowai	iowai
245	曰	yue	yuwei	iowei	iowei	iowai	iowai
642	遠	yuan	yuwan	iowan	iowan	iowan	iowan
895	願	yuan	yuwan	iowan	iowan	iowan	iowan

上の例に見られるように、Ｓ．Ｓ．は満洲字yu- をあてるが、Ｖ．Ｌ．などは満洲字io- をあてている。

『増訂清文鑑』では、現代北京音のyuan,yueに含まれるyuに対応する音を表記する場合、Ｓ．Ｓ．に同じく満洲字yu- を用いている。

No.	漢字	現代北京音	満洲字表記
50	月	yue	yuwei
348	元	yuan	yuwan

しかし、清初刊行の『清書対音協字』では、現代北京音がyue である漢字はすべて満洲字iowei のもとに配され、満洲字yuwei という項目は立てられていない。また現代北京音がyuanである漢字については、あるものは満洲字yuwan のもとに配され

あるものは満洲字iowan のもとに配されている。

満洲字表記	漢字	現代北京音
iowei	月、説、悦、越、曰	yue
yuwan	元、圓、員、爰、媛、院、園、袁、淵、原、源など	yuan
iowan	遠、怨、願、愿	yuan

このことから、現代北京音yuan,yueに対応する音の表記において、満洲字表記法の規範に動揺があったものと推測される。[21] 満洲字ioが［ｊｕ］と発音されることがあり満洲字yuとioに表記の流動があったとはよく言われることであるが、[22] 満洲字千字文テキスト間における叙上の表記の異同も、そのような事情を反映したものと考えられる。

［７］wei/ui

現代北京音のwei に対応する音の表記において、満洲字千字文の各テキストは異同を示すことがある。

No.	漢字	現代北京音	Ｓ．Ｓ．	Ｖ．Ｌ．	Ｂ．Ｎ．	Ｂ．Ｌ．	Ｕ．Ｌ．
39	為	wei	wei	wei	wei	wei	wei
993	謂	wei	wei	wei	wei	wei	wei
154	惟	wei	wei	ui	ui	ui	ui
602	威	wei	wei	ui	ui	ui	ui

No.39,993 ではすべてのテキストが満洲字wei をあてているが、No.154,602ではテキストによってちがいが見られ、Ｓ．Ｓ．は満洲字wei をあてているが、Ｖ．Ｌ．などは満洲字uiをあてている。現代北京音のwei に対応する音を表記する場合、Ｓ．Ｓ．はすべて満洲字wei をあてる（全12例）が、Ｖ．Ｌ．など他のテキストは満洲字wei （６例）のほか満洲字ui（６例）もあてる。

規範的な資料においては、現代北京音がwei である漢字の音を表記するとき、Ｓ．Ｓ．に同じく満洲字wei を用いている。例えば、『増訂清文鑑』では次のようである。

No.	漢字	現代北京音	満洲字表記
99	危	wei	wei
196	微	wei	wei

また、清初刊行の『清書対音協字』においても、為・韋・危・違・惟・委など現代北京音wei の漢字は、すべて満洲字wei のもとに配され、uiという満洲字の項目は設けられていない。このことから、満洲字の規範的な表記法では、叙上の漢字音を表記する場合、満洲字wei をあてることになっていたものと考えられる。

満洲字千字文の諸テキストにあらわれる満洲字wei/uiの流動の現象は、漢語の当

該音節における韻腹［ə］の有・無を反映したものと見られる。このような発音のちがいは漢語にあっては音韻的対立をなさないために、規範的な表記においては統一がはかられたのであろう。満洲字wei とuiの間に発音の混乱があったことはよく知られた事実であるが、[23] 満洲字千字文の諸テキストにおける満洲字wei/uiの表記の流動はそのことと関連があるものと推測される。

［８］［ŋ］韻尾の表記

現代北京音のng［ŋ］韻尾に対応する音の表記は、満洲字千字文のいずれのテキストにおいてもおおむねは満洲字ngをあてているが、まれに満洲字n をあてた例が見られる。

No.	漢字	現代北京音	S．S．	V．L．	B．N．	B．L．	U．L．
16	張	zhang	jang	jang	jang	jang	jang
278	澄	cheng	cen	cen	cen	[cen]	[cen]
828	紡	fang	fang	fan	fan	[fang]	[fang]
951	朗	lang	lang	[lan]	欠落	lang	lang

No.16 ではすべてのテキストが満洲字ngをあてているが、No.278ではすべてのテキストが満洲字n をあてている。No.828,951ではテキストによりばらつきがあり、ＳＳ．などは満洲字ngをあてるが、Ｖ．Ｌ．などは満洲字n をあてている。

『増訂清文鑑』などの規範的な資料においては、漢語の［ŋ］韻尾を表記する場合、満洲字ngをあてている。

No.	漢字	現代北京音	満洲字表記
6	上	shang	šang
8	清	qing	cing

しかし、満洲語では元来音節末の［n］と［ŋ］を区別しなかったものの如く、初期の満文資料には、漢語の［ŋ］韻尾を満洲字n で表記したものがよく見られる。例えば、『大清太祖武皇帝実録』には、次のような例が見える。

漢字	現代北京音	満洲字表記
教場	jiao chang	gio can
忠経	zhong jing	jung gin

満洲字千字文の諸テキストに漢語の［ŋ］韻尾に対して満洲字ｎを当てた例が数例あらわれるのは、満洲語の音韻体系に照らして漢字音をかきあらわしていた古い時代の表記法のなごりであると考えられる。

６．おわりに

以上、本論文においては、満洲字による漢字音表記の変遷、規範化の過程を明ら

かにする立場から、康熙年間に成立したと思われる満洲字千字文の諸テキストをとりあげ検討を加えてきた。今まで述べてきたように、満洲字千字文の諸テキストのうちのあるものは、『増訂清文鑑』などの規範的な資料に見られる漢字音表記とはかなりへだたった表記をおこなっている。Ｓ．Ｓ．は、編者尤珍の翰林院編修という肩書きによって知られるとおりさすがに規範的な色彩が強く、『増訂清文鑑』など後代の資料に見られる表記とほとんど一致する傾向を示すが、編者未詳のＶ．Ｌ．などには、それらとはことなる非規範的な表記がそこここに散見される。文白異読の場合、Ｓ．Ｓ．が文言音に対応する表記をおこない、Ｖ．Ｌ．などが白話音に対応する表記をおこなっているのも、両者の資料的性格のちがいを端的にものがたるものであろう。従来、近古漢語の資料として満洲字による漢字音表記を利用する際、もっぱら規範的な資料のみがとりあげられるきらいがあったが、そのような規範の成立、意味するところを明らかにするためにも、もっと非規範的な資料に対する調査がおこなわれねばならないと思う。

注

＊本論文における満洲字のローマナイズはMöllendorfの方法による。なお、誤刻などにより判読およびローマナイズが困難な満洲字については、推定形を[　]内にしめす。

１）「清書千字文」の詳細については、池上(1962)pp.106-108を参照されたい。

２）「清書千字文」が収録された『百體千字文』は尤珍の父尤侗の鑒定になる。

３）神田信夫先生の御教示による。

４）ヴァチカン図書館所蔵『満漢千字文』の詳細については、神田(1965)pp.240-241; Kanda(1968)pp.89-90; Kanda(1969)pp.135-136,p.143; Stary(1985)No.50 を参照。

５）パリ国民図書館所蔵『満漢千字文』の詳細については、岸田（1994, 1995）を参照されたい。

６）大英博物館所蔵『満漢千字文』の詳細については、池上(1962)pp.106-108; 神田(1965)pp.239-240; Kanda(1968)p.88; Kanda(1969)pp.133-135; Simon(1977)p.110, NO.Ⅱ.132.A-Cを参照されたい。

７）ライデン大学漢学研究所所蔵『満漢千字文』については、池上(1962)pp.106-108;神田(1965)pp.239-240; Kanda(1968)p.88; Kanda(1969)pp.133-135を参照。

８）『国朝耆献類徴』巻１「達海伝」に「対音」と「切音」についての言及あり。黄俊泰（1985）pp.14-30を参照。

９）漢語の［－ｉŋ］韻母における韻腹［ə］の有無について、王力（1987）p.519 脚注１は次のように述べる。

「［ｉŋ］即［ｉəŋ］。実際読音是［ｉŋ］，有人也読［ｉəŋ］。依音位観点当作［ｉəŋ］。」

また、［－ｕəｉ］韻母における韻腹［ə］の有無に対する音韻論的な解釈について、同書p.528 は次のように述べる。

「灰堆的合口呼，実際上読成両類：喉牙音読［ｕəｉ］，如“帰”［ｋｕəｉ］“窺”［ｋʻｕəｉ］，“灰”［ｘｕəｉ］；舌歯音読［ｕｉ］，如“堆”［ｔｕｉ］，“推”［ｔʻｕｉ］，“追”［ｔʂｕｉ］。但是，従音位観点看，可以一律写作［ｕəｉ］。」

また、同書pp.522-523は、［ｉｎ］韻母や［ｕｎ］韻母においても、韻腹［ə］の有無が音韻的対立をなさないことを述べている。

10）山崎（1990ｃ）p.72など。

11）康熙帝の名前の「玄燁：ｈｉｏｗａｎ　ｙｅｉ」に用いられるｈｉｏｗａｎという満洲字綴りを避ける習慣は、当時のその他の資料においても発見できる。満洲字を用いて漢字音の尖団の区別をあらわした『円音正考』（1743原序）[21b] には満洲字綴りsiowanの項目に、

「團音siowan　此團音字敬避俱用尖音」

との注記が見え、そのあとに鉉・眩・暄・喧・諠・懸など牙喉音由来の声母をもつ漢字が配されている。一方、「新刻清書全集」（1699）に収められた『清書対音協字』では、眩・懸・鉉・喧など牙喉音由来の声母をもち現代北京音がxuanである漢字は、元・圓・員など現代北京音がyuanである漢字とともに、満洲字綴りyuwan のもとに配されている。康熙以降に刊行された千字文テキストの中には、本来「玄」である第３字めの漢字を「元」に作ったものが時折見られるが、『清書対音協字』における満洲字のあて方は、そのような事実と関連があるものと推測される。ちなみに、満洲字千字文の各テキストにおける第３字め（No.3）の漢字および満洲字表記は以下のようになっている。

	Ｓ．Ｓ．	Ｖ．Ｌ．	Ｂ．Ｎ．	Ｂ．Ｌ．	Ｕ．Ｌ．
漢字	なし	玄	玄	玄	玄
満洲字	yuwan	hiowan	hiowan	hiowan	hiowan

Ｓ．Ｓ．の満洲字表記がyuwan となっているのは、『清書対音協字』の方法と軌を一にするものである。岸田（1994）pp.81-82およびpp.110-111注19を参照。

12）山崎（1990ｃ）p.72など。

13）舌面音化した牙喉音由来の声母の表記に満洲字g,k,h を用いるようになったことにより、後代満洲字の音価に変化がおこり、それらの文字を口蓋音で発音するようになったもようである。これについては、Zacharov(1879)p.57; 服部（1937）；庄垣内（1979）pp.42-44などを参照。

14）満洲字siとšiの発音の混同については、Zacharov(1879)p.59、池上(1986)§17, 19を参照されたい。

15）これについては、岸田（1994）p.111 注20などを参照されたい。

16）満洲字ū の音価については、池上（1946）；池上（1950）第２項；池上（1994）などを参照。

17）今西（1958）p.35など。

18）「欽定清漢対音字式」の按語については、落合（1985ｂ）pp.183-184を参照。

19）「欽定清漢対音字式」に次のようにある。

yen　音。按　世宗憲皇帝廟諱上一字用yen 字恭代　[18a]

20）ただし、No.365の漢字「切」については、方言により、車遮［ｉε］韻に由来する字音と斉微［ｉ］韻に由来するべき字音（ただし『中原音韻』は漢字「切」について車遮韻のみを示し斉微韻は示さず）とを区別するものがあり、例えば，広州では前者は［ｔʃʿｉｔ］と、後者は［ｔʃʿɐｉ］と発音される（北京大学中国語言文学系語言学教研室（1989）p.48を参照）。満洲字千字文の諸テキストが漢字「切」に対してciyai という満洲字表記をあてているのは、あるいは、そのような漢語方言における、後者すなわち斉微韻に対応する字音をあらわしたものかも知れない。

21）さらに後代の『音韻逢源』では、願・元・原・源など疑母（［ŋ］声母）由来の漢字は満洲字yuwan のもとに配し、淵・遠・院・員・沿など影組（ゼロ声母）由来の漢字は満洲字iowan のもとに配して、かきわけをおこなっている。しかし、このようなかきわけはまったくの作為と見られ、当時の漢語の実態とはかけはなれたものであると考えられる。

22）これについては、Zacharov(1879)pp.23-24; 池上（1954）第３項；池上（1994）p.10を参照。

23）これについては、Zacharov(1879)p.54; 庄垣内（1979）p.43; 池上（1987ａ）§36; 岸田（1994）p.112 注24を参照されたい。

参考文献

服部四郎（1937）「満洲語音韻史の為めの一資料」　『音声の研究』6, 279-294.

早田輝洋（1990）「満洲語文語の漢字音について－『満文金瓶梅』を資料として－」『九大言語学研究室報告』11, 1-8.　福岡.

池上二良（1946）「満洲語の若干の文語形中のūの表す母音に就いて」　『東洋語研究』1. 18-24.　東京：東京帝国大学文学部言語学研究会.

_____（1950）「満洲語の諺文文献に関する一報告」　『東洋学報』33-2, 97-118. 東京.

_____（1954）「満洲語の諺文文献に関する一報告（承前）」　『東洋学報』36-4,

57-74. 東京.
_____ (1962)「ヨーロッパにある満洲語文献について」 『東洋学報』45-3, 105-121. 東京.
_____ (1963)「ふたたび満洲語の諺文文献について」 『朝鮮学報』26, 94-100. 東京.
_____ (1986, 1987a, b)「満漢字清文啓蒙に於ける満洲語音韻の考察(1)-(3)」『札幌大学・女子短期大学部紀要』8(28), 1-26; 9(29), 1-24; 10(30), 1-26. 札幌.
_____ (1994)「満洲語文語の正書法の沿革－特にo, u, ūについて」 『東方学』88, 100-110. 東京.
今西春秋 (1958)「漢清文鑑解説」 『朝鮮学報』12, 21-58. 天理.
岩田憲幸 (1988a, b, c, 1989)「『音韻逢源』の音系 －現代北京語音との比較－ (上), (中), (下の1), (下の2)」 『近畿大学教養部研究紀要』19-3, 29-53; 20-1, 85-101; 20-2, 127-165; 20-3, 87-121.
神田信夫 (1965)「欧米現存の満洲語文献」 『東洋学報』48, 222-247. 東京.
岸田文隆 (1994, 1995)「パリ国民図書館所蔵の満漢『千字文』について(1)-(2)」『富山大学人文学部紀要』21, 77-133; 22, 105-139. 富山.
中嶋幹起 (1993)『電脳処理 御製増訂清文鑑(1)』(アジア・アフリカ言語文化叢書28) 東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
_____ (1994)『電脳処理 御製増訂清文鑑(2)』 東京：不二出版.
落合守和 (1985a)「《増訂清文鑑》十二字頭の三合切音」 『静岡大学教養部研究報告』人文・社会科学篇20-2, 75-99.
_____ (1985b)「《清漢対音字式》に反映した18世紀北京方言の音節体系」『静岡大学教養部研究報告』人文・社会科学篇21-2, 171-214.
_____ (1986)「《滿漢字清文啓蒙》に反映された18世紀北京方言の音節体系」『静岡大学教養部研究報告』人文・社会科学篇22-2, 111-151.
_____ (1989)「翻字・翻刻《兼満漢語満洲套話清文啓蒙》(乾隆26年, 東洋文庫所蔵)」 『言語文化接触に関する研究』1, 67-103. 東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
讃井唯允 (1980)「音韻逢源と等音」 『人文学報』140, 155-176. 東京：東京都立大学人文学部.
庄垣内正弘 (1979)「『五体清文鑑』18世紀新ウイグル語の性格について」 『言語研究』75, 31-53. 東京.
山崎雅人 (1990a)「『大清太宗文皇帝実録』の満洲語音訳漢字から見た漢語の牙音・喉音の舌面音化について」 『文化』53-3/4, 19-37. 仙台：東北大学文

学会.
_____ (1990b)「音韻変化に反映した近代漢語の声母構造について」『中国語学』237, 33-42. 東京：日本中国語学会.
_____ (1990c)「『[満文]大清太宗文皇帝実録』の借用語表記から見た漢語の牙音・喉音の舌面音化について」『言語研究』98, 66-85. 東京：日本言語学会.

季永海 (1991)「清代満漢音韻書三種」『満語研究』13, 64-71. ハルピン：黒龍江省満語研究所.
王力 (1987)『王力文集 第十巻－漢語語音史－』 済南：山東教育出版社
北京大学中国語言文学系語言学教研室 (1989)『漢語方音字彙(第二版)』 北京：文字改革出版社.

成百仁 (1984)「譯學書에 나타난 訓民正音 使用－司譯院 清學書의 만주어 한글표기에 대하여」『韓国文化』5, 21-63. ソウル.
黄俊泰 (1985)「漢清文鑑 漢語한글 転写에 대한 音韻論的 研究」 成均館大学校大学院国語国文学科碩士論文. ソウル.

Courant, M. (1894-1901) Bibliographie Coréenne. Paris.
CP (1911) Collection d'un Amateur [v. Collin de Plancy], Objets, D'art de la Corée, de la Chine et du Japon. Paris: Ernest Leroux, Editeur.
Fuchs, W. (1936) Beiträge zur Mandjurischen Bibliographie und Literatur. Tokyo: Otto Harrassowitz.
_____ (1942) "Neue Beiträge zur Mandjurischen Bibliographie und Literatur", Monumenta Serica. 7, 1-37.
Kanda, N. (1968) "Present State of Preservation of Manchu Literature", Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko. 26, 63-95. Tokyo: The Toyo Bunko.
_____ (1969) "Shen Ch'i-Liang and his Works on the Manchu Language", Proceedings of the Third East Asian Altaistic Conference. 129-143. Taipei.
Puyraimond, J. M. & Simon, W. & Séguy, M. R. (1979) Catalogue du fonds mandchou. Paris: Bibliothèque Nationale.

Schmidt, P. (1931-32,33) "Chinesische Elemente im Mandschu. Mit Wörterverzeichnis", Asia Major. 7, 573-628; 8, 233-276, 353-436.

Simon, W. & Nelson, H. G. H. (1977) Manchu Books in London, A Union Catalogue. London.

Song, K. (1981,1982a,b) "The Study of Foreign Languages in the Yi Dynasty(1392～1910)", Journal of Social Sciences and Humanities. 54, 1-45; 55, 1-63; 56, 1-57. Seoul: Korean Research Center.

Stary, G. (1985) Opere Mancesi in Italia e in Vaticano. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

Zacharov, I. (1879) Grammatika manczurskogo jazyka. Sanktpetersburg.

（きしだ　ふみたか、富山大学）

Standardization of Manchu Transcriptions of Chinese

Fumitaka KISHIDA

Manchu transcriptions of Chinese words are very valuable to the study of Chinese phonology of the Ch'ing dynasty. However, it is not yet confirmed whether they represent the actual pronunciation of Chinese or not. It is necessary to investigate changes in the writing systems, or the process of standardization. In this paper, I have researched the writing systems of several Manchu texts of *Ciyan dzi wen /Qian zi wen* (千字文) compiled around the end of the 17th century, comparing them with those of standard texts such as *Han i araha nonggime toktobuha manju gisun i buleku bithe /Yu zhi zeng ding qing wen jian* (御製增訂清文鑑)(1771). I demonstrate that these texts have been transcribed in many various ways differing from standard ones, as following:

Modern Pekingese	Manchu transcriptions (in standard texts /in *Ciyan dzi wen* texts)
j, x(<velar [k], [h])	g/j, h/s
j(<dental [ts])	j/k(*g)
shi	ši/si, sy
-ao	ao/oo
-u-	ū/o, owe, u
-i	i/ii
-i-	i/ye, iye
-ie(<[iai])	iyai/iye(i)
-ie(<[iɛ])	iyei/iya(i)
yu-	yu/io
wei	wei/ui
-ng	ng/n

It is possible that some of the differences in the Manchu transcriptions may reflect the transcripters changing from the Manchu phonological system to the Chinese.